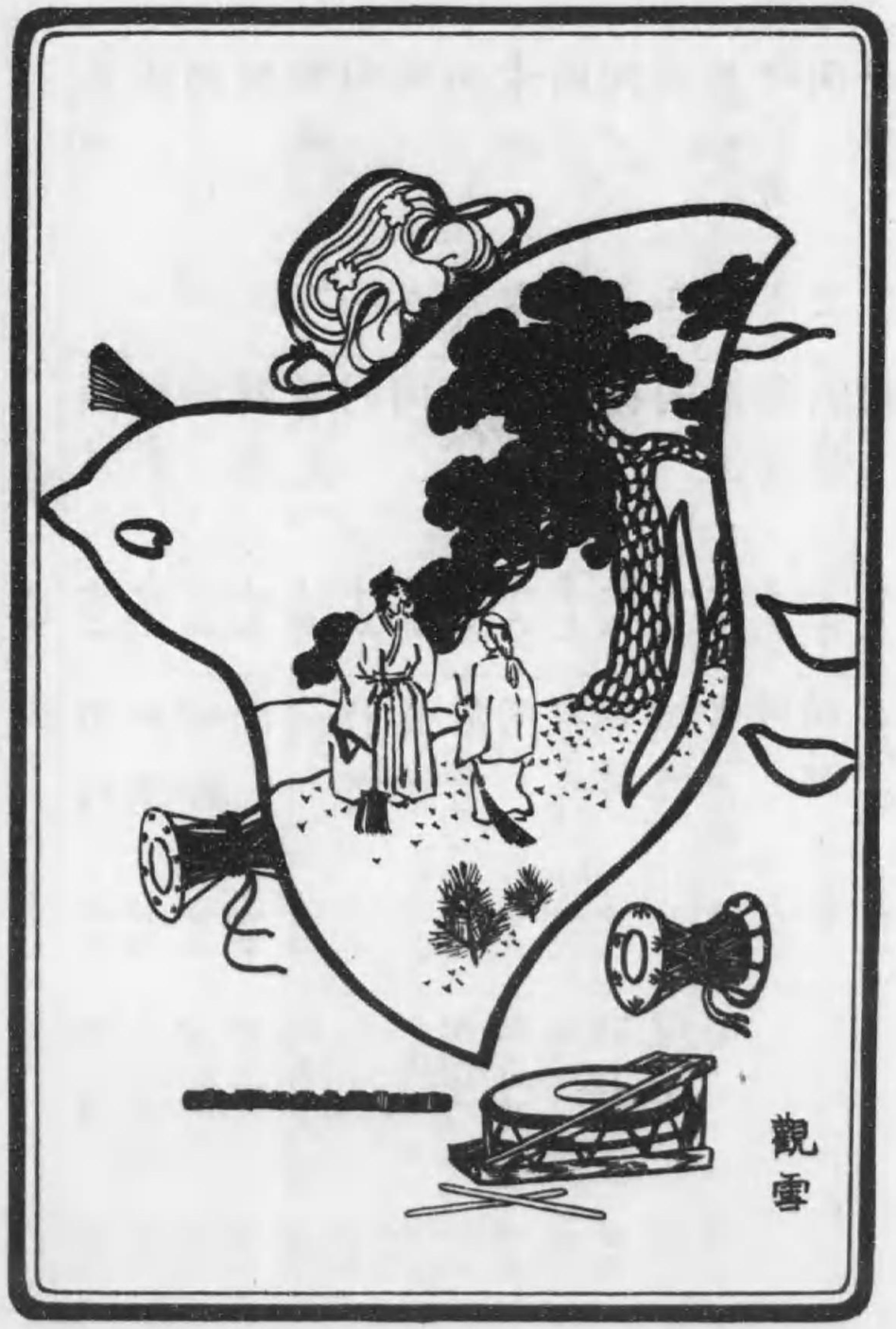
特116
715

観世流 改訂 小謡集 全

始

大正
12.11.30
内交



漁五十曲譜

旅泊得知人　不軍戰戰場　不思昇仙之
不敢望死自　不觸知佛道　不考知古事
無藥散聲色　不行知名所　不別近武藝
不望文言法　不習機微道　不於得神德
不契思惠心　無仍慰閑居　不嚴格形義

小謡目次

高砂	一	頼政	十二	田村	廿二
同	二	羽衣	十二	阿漕	廿二
同	三	同	十三	邯鄲	廿三
同	三	鶴亀	十三	同	廿四
難波	四	養老	十四	同	廿四
同	五	同	十五	松浦	廿五
同	五	同	十五	貴船	廿五
同	六	七人猩々	十六	熊野	廿六
老松	六	弓八幡	十六	同	廿六
同	七	八島	十七	玉の井	廿七
同	八	羅生門	十八	諏訪	廿八
同	九	嵐山	十九	蟻通	廿九
蓬萊	九	志賀	十九	俊成忠則	三十
竹生島	十	大社	二十	同	三十
同	十一	同	廿一	頂羽	廿一
常磐木	十一			當統殿	廿二
総角	廿二				
元服曽我	廿二				
白樂天	廿三				
大蛇	廿四				
鞍馬天狗	廿五				
右近	廿五				
九月九日	廿六				
松虫	廿六				
草紙洗小町	廿七				
同	廿八				
羽衣	廿九				
猩々	四十				
同	四十				

正月

高砂

上寿ジョウ

處は高砂の尾上の松も年ふりて。老の彼もより来るや。木の下陰の落葉かくあるまで命ながらへて。猶何時までか生の松。それも久しき。名所かな

同

上ツヨク四海浪静まって。國も治まる時津風枝
を鳴らさぬ御代あれや。あひよ相生の。
松こそ芽出度かりけれ。實や作ぎて
も。こしも愚やかゝる世よ。住める民とてゆ
たかある。君の惠ぞ。有難き君のめぐみぞ、
ありがたき

同

上ツヨク正木のかつら長き世のたとへありけると
きは木の中なる名は高砂の。末代のため
しにも相生の松ぞめでたき

同

上ツヨクきす腕まへ。惡魔を拂ひ。ねたむる手
にへ。壽福を抱き。千秋樂へ民を撫で。
萬歳樂まは命を延ぶ。相生の松風颯

こゝ八八二下二、二下二、中ヲ二下、
ゝの聲ぞ、樂む風ゝの聲ぞ、たのしむ

四

難波

二月

上寄、ツヨク祝ふ心ぞ、こゝ雲りあき。天津日嗣
の御調物。運ぶ巻や都路の直ある御代を
作がんと。開の戸きて千里まで。蒼くて
らす。日影かゝ蒼く照す、日影かゝ

同

上寄、ツヨク難波津よ咲くや木の花冬籠り。今ハ春
べよ匂ひきて。咲けども梅の風。枝を鳴ら
きぬ代さかゝ。賓や津の國のゝあてその
事に至るまで。豊ある世のためしてそ。
賓道廣き。治めあれ賓道ひろき治めあれ

同

上、ツヨク ゆるす故よやおかなかいやまして運ぶ御

五

寶の千秋萬歳の千箱の玉を奉る

六

同

上　雅波の梅の名にしおふ匂ひも四方に普

ツヨク　ねく一花開くれば天下みな春あれやよ

ろづ代の狩安全ぞめでたき

老松　正月

上哥　松が根の岩間を傳ふ苔莚敷鳥の道

ツヨク

までも實ありや此山の天ぎる雪の古

枝をも狩惜まず花盛り手折やるさ

守る梅の花垣いざやかてもん梅の花垣

をかてもん

同

中　此松俄に大木となり枝を垂れ葉を並

ツヨク　べ木の間すきまを塞ぎて其雨を漏らさ

七

ぎりしかず。帝大夫と云ふ爵を賜りた
まへしより松を大夫と申すあり

同

上 守るべしまもるべしや。神はこも同じ
名の天満つ空も紅の。花も松も法華よ。萬
代の春とかや千代萬代の春とかや

同

中 鶴亀の齢を授くるこの君の。行く末まも
れと我神託の告を知らす。松風も梅も久
しき春こそめでたけれ

蓬莱　正月

上 松つ祝のものもれだいぐ多く数の子
よ。福と寿命をゆずり葉や。花たちばな
の香をとめて。吉事おみきのかちらけよ。

めぐる日も長閑なる。行末めでたかりけれ

十

仲生鳴　三月

上寄　名所多き數〻よ。浦山かけて眺むれば。
志賀の都。花園昔あがらの山櫻。眞盛
の入江の船呼ぶ。いざさよせてこそ
もんいざさよせてこと問もん

同

上　緑樹影沈んで。魚木よ登る氣色有り。
月海上に浮かんで兎も浪を奔るか面
白の島の氣色や

常磐木　正月

上　げにや常磐ぞ木の。松の葉色もいやまし
よ。國ぞも治り。平かの世代ぞめでたき

頼政　五月

上ハ八字下ハ二字

ヨハク 實や名ゝ負ふ。都ゝ近き宇治のさと、
聞きしゝ優る名所かな

イコトヽウ

羽衣　三月

上ハ八字下ハ二字

ツヨク 松ハ常盤の聲ぞかし。波ハ音あき朝
あぎよ。釣人多しきゝ小舟かな
ヲコトヽウ　ネ
小舟かな

同

上ハ八字下ハ二字

ヨハク 緑ハ波よ浮鴨が。拂ふ嵐よ花ふりてげに
雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる
バクウン　ヤ　ヒウ

鶴亀　正月

上ハ八字下ハ二字

ツヨク 庭の砂ハ金銀の玉と連ねて數妙の五百
ヤ
重の錦や猫殿の扉。碑碌の行桁鴛鴦の
トボソ　ヤ　ヤ　ヒカ
ミギワ
池の汀の鶴亀ハ蓬萊山もよそならず。
ホウライサン

十二　十三

中　君の裏ぞ有難き君の裏ぞ有難き　十四

養老　四月

上寄　長生の家よりそ。老せぬ門にあるあるにて。
これも年ふる山住の。千代の例を。松蔭
の岩井の水。藥にて。老を延べたる心とそ。
中　猫行末も。久しけれ。行末も久しけれ

同

上　晉の七賢が樂み。劉伯倫が戯び。唯此水
に浸れり。汲めやくめ。あひ藥を。君の為に捧げん

同

上　翁も養されて。此水にあれ。衣の袖ひたして
掬ぶ手の。影さへ見ゆる山の井の。愛も
藥と思ふより。老の姿も若水を見る
てそ嬉しかりけれ

七人猩々　正月

御子孫も繁昌。御寿命も長く生の
松の千代かけて御悦びの御酒をいざや、
進めん

弓八幡　二月

松高き。枝もつらなる鳩の巌。雲らぬ御
代八久堅の月の桂の男山賞るもさやけ
き影よ来て。君萬歳を祈るある神よ
歩みを運ぶあり神よ歩みを運ぶあり

八鴻　三月

海士の小舟のほのぐと見へて残る夕ぐれ。
浦風までも長閑なる。春やこゝを誘ふら
ん春やこゝろを誘ふらん

羅生門　二月

上ヨハク 伴ひ語らふもろびとよ。御酒を進めて盃を。

取りどりあれや捧げ手。やたけ心のひとつお

武士の交り。頼みある中の酒宮かお

十八

同

上ヨウク 志ぐく言葉の花も咲き。匂ひも深きく

れあひよ。面とめで〳〵人ごころ。隔てぬ中の戯

れへ。おもしろや諸芸よ。近く居よりて語らん

嵐山

上ヨハク 三芳野の千本の花の種植へて。嵐山あ

らたかる神あそびぞめでたきこの神あ

そびぞ目出たき

三月

志賀

上ツヨク 實や今迄。筆も強して貫之が。言葉

の玉の白ら。古今の道とかや古今の道とかや

三月

十九

大社

上哥 神の代を。思ひ出雲の宮柱。ふとしきたて敷島の。大和島根まで。動かぬ國ぞ久しき。實や紅も。深くあり行く梢より。時雨れて渡る深山辺の。雲も冬ぐ立つ。紫色かな

同

上哥 何處よか。神の宿らぬ影あらん。嶺も尾上も松杉も。山河海村野田畑る方あく神のまゝ。御影を受て隔てあき。宮人多き。住来かな宮人おほき住来かな

田村

三月

上哥 白妙よ。雲も震も堰れて。何れ樗の梢ぞ。見渡せば八重一重。げに九重の春の空

四方の山普み白ら時ぞと見ゆる。氣色かな
あ時ぞと見ゆる氣色かな

同

上　長閑き影有明の。天も花よ醉へりや。春も
しろの春辺や。あらはもしろの春遠や

阿漕　九月

上　月見んとその。海士の志ぞ。ぢと。許さ
れまうす海士衣。敷嶋よ寄りくる人お
みよ如何で。演るべき

部　鄙　無季

上　庭まへ金銀の砂を敷き。四方の門辺のお
の戸を。出て入る人まずでも。光を飾るよそ
ほひへ誠や名よ聞し。榮光の都喜見
城の。樂みも斯くやと思ふ新の氣色哉

同

上、花のたもとひろがへして、さすもひくも
光あれや盃の影の廻る空で久しき

同

上、飲めど甘露も斯くやらんと、てるも晴れ
やかよとび立つざかり有明の夜書とあき
樂みの榮華まも、榮耀まもげよ此上や、

あるべき

正月

上、春毎よ。君を祝ふや千代の松。たつや緑も若
竹の茂れる宿の数々よ。住来の人も豊にて。
猶萬代と。祈らまし猶萬代と祈らまし

松竹

無季

上、いたんやまし婦のおかだち。花き武士の心

貴船

ちも。和ぐる言の葉ハよも盡せじ。樂もしや

二十六

熊野　三月

上　雲かと見へて八重一重。咲く九重の花
盛り。名ゝ夏ゝ春の。氣色かな。名ゝおふ
春の氣色かな

同

上　南を遥かゝ眺むれば。大悲擁護の薄が
すゝ。熊野權現の移ります。御名も同じ
今熊野。稲荷の山の薄紅葉の。青かりし
葉の秋。また花の春ハ清水の。惟頼めたの
もしき春も千ぢの花ざかり

玉の井　無季

上　長き命を汲みて知る。そころの底も曇
りあき。月の桂の光。そふ枝をつらねても

二十七

ろともよ。朝夕あふぎ玉の井の深き恵り
い。樂もしや深き恵り樂もしや

無季

諏訪

上寿 君が代は千代よ八千代とぞ流れ石巌と
なりて苔のむす。松歳歳よ鳴海浦。誰も
頼ひ満潮の。唐國までも治まれる。今
此ぞ代ぞめでたき今此ぞ代ぞめでたき

四月

蟻通

上寿 賢や和哥の事業。神代よりも始まり。
今人倫よあまねし。誰かこれを賞めざ
らん。中にも貫之は御書所をうけたま
はりて。古へ今までの。哥の志をえらび
て。悦びをのべ。君が代の直あるみちを、
顕はせり

上ヨハク 八雲たつ出雲八重垣妻こめて八重垣造る その八重垣を。神詠もかたじけなや 今の世のためしあるべし

三月

同

上ヨハク 松の葉の散り失せず。眞折のかづら。永く傳たり。鳥の跡あらんそのほどは。よも盡せじ。おもきまの。寄よへ神も納受の。男女。夫婦の媒。さも此歌の言葉あるべし

九月

項羽

上ヨハク 天の川。唯渡りして七夕の。年に一夜へ心せよ。秋風吹けば波の音。湊に近き海士小舟。水音あしに行く舟の。見馴棹をさすよ

正月

上ツヨク 君へ千代ませ千代まませと。繰り言を祝ひ
歌の。ありがたの勝代や

三月

紙　角

上ツヨク 武士の。家五みよ咲ける櫻花。華やかありし
鎧着て。名をば雲井よ揚巻や。梓の眞中
み遥かある。人の國まであびく世の幾久

しさも。限らじや幾久しさも限らじや

五月

元服曽我

上ヨク 年ゝ月日を迎へても。猶聖人の急ぎつ
る。其甲斐ありて今いちや。昔よ影高き
花の若枝ぞめでたき

無季

白樂天

上ツヨク 寿ゝ。花よ帝ゝ鶯。水よ掬める蛙まで。唐土ハ知

らず日本まへ。歌を積み候で翁も。大和
歌をべ形の如くよむあり

三十四

大蛇　十月

上ヨハク　真経治まる國津神。茲に宮居の二柱。立
つや八雲の書こめて。八重垣つくる言の葉
の。三十一文字の。詠歌の始めあるべし

鞍馬天狗　三月

上寄ヨハク　花咲うべ。告げんと云ひし山里の。使ひ来
り馬よ鞍。鞍馬の山のうづ桜。手折禁をば知
べまて奥も迷ひて咲きつづく。木陰よ
並み居ていざいざ。花を眺めん

右　近　二月

上ヨハク　松も木高き梅が枝の。たちえも見へて
紅の。初花車廻る日の。輦や北よ續くら

三十五

んおがえや北よ續くらん

九月九日　九月

上、元八　ヨハク　れらぞや折らん初霜のまがきよ匂ふ
白菊の花をかざして誰もみお千歳
の秋や裏らん千歳の秋やちぎらん

松虫　九月

上、元八二　ヨハク　千年の秋をも限らじや松虫の音も
盡きじ。何時まで草のいつまでもかた
らぬ友とそへ買ひ得たる市の寶あれ
買ひ得たる市の寶あれ

草紙洗小町　四月

上元　ツヨク　其歌人の名前も皆庭上よあみ居つ君
の宣旨を侍居たり君の宣旨を侍居たり

同

上ヨハク

四海の波も四方の國々も民の戸ごとも。さ
すぬる代こそ。竟舞の嘉例あれ。大和
歌の起りは。あらがねの土をして。素盞
嗚尊の。守り給へる神國あれど。花の都
の春も長閑なる。花の都の春も長閑なる。
和歌の道こそ。めでたけれ

三十八

羽衣

キリ上

端ノ舞ヨハク

打上

東遊びの。数々なる。東あそびの数々なる。其名
も月の。色々に。三五夜中の。空なる。満月眞
如の影さあり。御願圓満國土成就七寶充
満の寶を降らし。國土をこれを。施し給
ふ。ふさる程よ。時移りて。天の羽衣。南風にまた
なびきたなびく。三保の松原浦島が雲
の。愛鷹山や富士の高嶺。かすかにありて

三十九

天つ御空の霞まぎれてうせにけり

猩々

老いせぬや藥の名をも菊の水盃も
浮みいでゝ友よ逢てよぞ嬉しき此友よ
逢てよぞうれしき

同

よもつきゞ萬代までの竹の葉の酒
酌めども盡きず飲めども かたらぬ秋
の夜の盃影も傾く入江よ並立つ足元
よろよろと乱ひよ郎たる枕の夢の
醒むるとも思へば泉ハ甚まゝ盡きせぬや
どこそめでたけれ

小謡集 完

284
110

大正十二年十二月一日四版印刷
大正十二年十二月七日四版發行

訂正者　松江聯合研究會
松江市京次本町七十二番地

發行者　有田傳助
東京府豐多摩郡淀橋町角筈一番地

印刷者　吉田千太郎
東京府豐多摩郡淀橋町角筈一番地

印刷所　吉田千太郎
松江市京店

發賣所　有斐堂書店
電話　二三五番
振替大阪三五六三番

終